

# 潤一郎あれこれ

雪子と重子と「平安神宮の花見」  
—「細雪」と戦争の時代—

優美極まりないが何につけ優柔で、返事はといえば、いつも「ふん」の生返事。自分の気持ちを、はっきり表わそうとしない。それでいて、したたかに思いを通してしまふ…。谷崎潤一郎の代表作「細雪」のヒロイン雪子は、そんな女性である。

芦屋に暮らす中産市民家族の、1936(昭和11)年の秋に始まる、穏やかで豊かで美しい日常を描いた傑作「細雪」。その主人公時岡家の人々は谷崎一家そのもので、雪子のモデルは谷崎の妻松子の妹重子になる。作品での出来事も、当時の谷崎家の事実ほぼそのまま。雪子にはいくつもの縁談が持ち上がるが、重子も見合いを繰り返した。見合い相手からの電話に、もじもじとしてなかなか受話器を取ろうとしなかったというエピソードはいかにもだが、これも実際にあったことだったのだろう。その一方で、結局は思い通りに家柄の良い相手に縁づいてゆくのも雪子と同じ。作中の雪子は、藤原氏の流れをくむ公家の家筋に嫁ぐが、重子は松平家の血を引く男性と結ばれる。

重子の羽織は、平安神宮での花見の折に着られたもの。戦後の一着で、彼女らしい、奥ゆかしくも芯の通った優美さを映し出している。

平安神宮での花見は、谷崎一家、そして「細雪」の時岡一家が心待ちにしていた、毎年の春の催しであった。年々の写真は、満開の桜と着飾った女たちが咲き競って美しく、この花見が彼らにとってまさに特別な毎年の行事であったことを物語っている。一家の人々は、その花の巡るたび、今年こそはと雪子そして重子の良縁とその行く末の幸を願いつつ、ともに過ぎゆく春へのなごり惜しさ寂しさに誘われもするのであった。

一方、1936年秋に幕を開ける小説の世界は、戦争の時代でもあった。1937年夏に火ぶたが切られる中国との戦争は、花見の春を追うごとに泥沼化し、巷には「挙国一致」の標語があふれるようになる。「勝ってくるぞと勇ましく〜」(「露堂の歌」1937年)と軍歌の威勢の増すにつれて、パーマントは肩身が狭く(「パーマント追放運動」1939年)、街のネオンも消えていく。「一汁一菜」が流行語となり、駅弁に焼き芋が登場した(1939年)。

破局への暗く速い流れは、すでに日本を呑み込んでいた。1941年春、その年の花見もすませ、雪子そして重子が嫁いでゆくところで、「細雪」の物語と現実とは、ともに幕を降ろす。そしてその冬には、ついに太平洋戦争の戦端が開かれるのだ。

名場面中の名場面として、「細雪」の作品世界を象徴する「平安神宮の花見」。雪子や重子の面影とも重なるその優美は、重苦しい陰画に縁どられていたのである。

芦屋市谷崎潤一郎記念館 井上 勝博



平安神宮の花見 1940年  
左端が重子  
(AIによる自動彩色を人間の調整で仕上げた彩色写真)



重子の羽織

谷崎記念館だより 2024

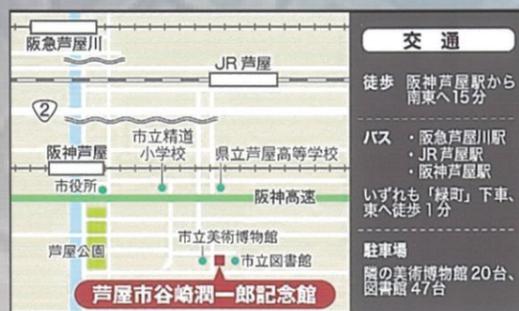
2025年3月1日発行

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町 12-15

Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244

HP: <https://www.tanizakikan.com/>



vol.6 2024

# 谷崎記念館だより

第38回 残月祭

津村 記久子 講演会



第38回 残月祭

津村記久子講演会「日常と文学」

文豪・谷崎潤一郎を偲び、誕生日を祝う「残月祭」。7月24日の誕生日に近い、21日(日)に芦屋ルナ・ホールにて行った。

今回は、作家の津村記久子さんにお越し頂き、「日常と文学」というタイトルでご講演頂いた。津村さんとの共著がある、編集者・著述家の江弘毅さんにナビゲーターをお願いし、対談形式でお話を進めて頂いた。三度目の妻松子夫人とその妹たちとの日常を描いた谷崎の代表作「細雪」を取り上げられた。未婚の妹二人の見合いや恋愛を中心に、三女雪子がお見合いを

繰り返す中で終始受け身の様子や、お見合いの場所にこだわりを見せ、実在する店名を挙げていく描写など、女性の生活に起きることを細やかに描いている点に、「細雪」の特徴や良さが表れていると述べられた。また、2023年の谷崎潤一郎賞受賞作『水車小屋のネネ』について、その創作秘話や作品のモデルとなった場所などをお話された。お二人のテンポの良い掛け合いに会場は盛り上がり、来場者は熱心に耳を傾けて文学の世界を味わった。

芦屋市谷崎潤一郎記念館

# 展示室から

## 春の特別展「谷崎的『夫婦』のカタチ」

美しくもそれぞれに個性豊かな、谷崎作品のヒロインたち。そしてなぜか、彼女たちと男たちとは、「夫婦」であることが多い。

「痴人の愛」のナオミと譲治の、お伽噺のような家を舞台にした二人だけの「シンプリライフ」。「夢喰う虫」の「仮面夫婦」美佐子と要は、どこにでもいそうなるふつうの妻と夫にみえる。「春琴抄」の春琴と佐助の夫婦は、生涯「主従」の間柄を買った。「猫と庄造と二人のおんな」の庄造にとつて、二人の妻との関係は、手ごたえほどのものも無い幻のような……。

いかにも、彼らは夫婦である。が、そんな二人の関係は、婚姻制度に裏づけられた良識の型にはめられた世間並みの夫婦のかたちにはおさまりきれない、風変わりなもののようにみえる。夫婦の間に血縁のつながりが絡むのを恐れて子を生むことを拒み、「他人行儀」で「多少の間隙」のある「妻と夫であって、そうでない」という、いわば「仮象の夫婦」を理想としていた谷崎。そんな谷崎じんの夫婦観や結婚観も、その作品の夫婦の有り様と関わっているのだろうか。

谷崎が描く「夫婦のカタチ」のウラには、どんな事情や背景があるのか。谷崎やその周辺の現実の夫婦関係も絡めながら、読み解いた。

2024年 3月16日(土)～6月9日(日)



最後の妻松子宛の電報



最初の妻千代との結婚記念  
1915年5月



## 夏の特設展

### 「文豪の愛着

### 「谷崎が愛した小物たち」

身に着け、また肌を接しながら、使いこんできたモノたちには、おのずと、その人の体温が伝わっていきものだろう。趣味嗜好や価値観が色濃く映し出され、人とのつながり、身体的な特徴まで物語ってくれる。



キセル、煙草入れ、眼鏡

芦屋市谷崎潤一郎記念館には、文豪谷崎が生前愛用していた数多くの品々が所蔵されている。「商売道具」の文具はもとより、帽子や眼鏡・カメラ、著書の検印にも使われたこだわりの印鑑、希代の食いしん坊谷崎の食欲を最後まで支えた「入れ歯」まで……。



谷崎遺愛の多種多様な小物たちから、在りし日の文豪の愛着、その（手触り・肌ざわり・息づかい）をよみがえらせた。

2024年 12月14日(土)～2025年 3月9日(日)

## 冬の特設展 「幻想・怪奇・グロテスク—暗黒と流血の谷崎潤一郎—」

谷崎潤一郎といえば、女性美を描き続けた「美の作家」というイメージが強いのではないだろうか。

だが、大正時代を中心に、昭和初期くらいまでの谷崎には、幻想や怪奇に彩られ、時にグロテスクな様相すら漂わせる作品も少なくない。

人魚や魔術師を主題にした幻想的な物語、討ちとられた首に魅入られた武将が主人公の時代小説、悪女が仕掛ける血みどろの戯曲、人の顔をした腫物の笑いが映画の中で不気味に輝くホラータッチのストーリー……。

そんな谷崎の一面、「暗黒と流血の文豪」としての顔に焦点をあてた。



『武州公秘話』挿絵

2024年 9月14日(土)～12月8日(日)

## 秋の特別展 「モノクロームの繚乱—色彩の谷崎潤一郎—」

昨今の AI、その技術革新はめざましく、さまざまな方面に広がりを見せている。「モノクロ写真への彩色」も、その一つだろう。コンピューターが、白と黒との濃淡・風合いの微妙な差から、本来の色合いを割り出し彩色する。その「AIによる彩色」に、経験豊かな「写真のプロ」の職人技が、調整をほどこしていく。すると、モノクロームの永い眠りについてきた彩りの数々が、たしかなリアリティーをもって、鮮やかによみがえってくるのだ。

AIと人間の技術とによる「色彩の魔法」。その魔法を、館所蔵のモノクロ写真にかけてみると、どうなるか。

人生の節目ごとにみせる文豪の表情が色づく、はたして印象はどう変わるのだろうか。谷崎をとりまく女性たちの肌合いや眼差し、そして身につけていたそのキモノの色々にも興味は尽きない。「細雪」の時代の六甲山は、傑作の舞台となった芦屋の街並みを抱きながら、作中の叙述そのままに明るく輝く。その主人公たちのいで立ちがまた、予想どおりのきらびやかさ……。

モノクロームの封印を解き放たれた色彩が、新たに染め上げる文豪谷崎とその作品世界。

松子 打出の家の前で 1934年頃



原版モノクロ写真

調整済彩色写真



## 春 ロビーパネル展 「笑う、谷崎」

写真の中の谷崎潤一郎の顔は、一面白くなさそう「仏頂面」、「苦虫をかみ潰したような」洗面、はたまた、頑固そうな強面（こわもて）、といった印象が強いのではないか。

だが、そんな谷崎も、柔和な笑顔やほじけたような笑いをみせることがあるのだ。綺麗な女性と一緒にいる時、華やかなお祝いの場で、親しい人たちとともに……。そして、子や孫たちにみせる表情は、何ともいえない情愛に満ちている。

近寄りたがたい「文豪谷崎」のイメージからは意外な、「笑う谷崎」のポートレートをピックアップし、展示してみた。



40歳頃の笑顔



70歳頃の笑い

2024.4-2025.3

芦屋市谷崎潤一郎記念館

